

巻頭言

「言葉の示す世界」

理事長 新谷 友良

2月の巻頭言に続いて、言葉の話です。「大迫、半端ないって!」というテレビの音声ですぐには理解できませんでした。字幕に表現されても理解できず、翌日の新聞でゆっくり記事を読んで、その意味というより言いたい雰囲気理解できました。「大迫スゴイ、やるな、あいつは!」…。

もう少しマニアックに調べると、全国サッカー選手権で大迫選手のいる鹿児島城西高校に敗れた滝川第二高校の選手が試合後のインタビューで、悔し涙を流しながら「大迫半端ないって」とチームメイトや監督と共に大迫を絶賛したことがルーツのようです。大迫選手が日本を代表するプロサッカー選手に成長すると「大迫半端ないって」という言葉の知名度も上昇して、昨年サッカーワールドカップで一気にブレイク、2018 ユーキャン新語・流行語大賞のトップテンに入りました。

昔、国語の教師が「徒然草」の授業で、「徒然なるままに」という言葉を知らないということは、徒然という心の風景を知らないということだ」と宣(のたま)いました。「半端ない」が「大迫は半端な選手ではないよ!」ということ位すぐにわかってよ!」といわれそうで、言葉に対する感度の鈍さを恥じますが、その言葉が指し示す世界をわからないというのではなく、言い方にアレルギー反応したというところが正直な気持ちです。

「半端ない」だけではなく、短縮した言い方を中心とする若者言葉は「中学生から30歳前後の若い男女が仲間内で娯楽・会話促進・連帯・イメージ伝達・隠蔽・緩衝・浄化などのために使う、規範からの自由と遊びを特徴に持つ特有の語や言い回し」と梅花女子大学教授の米川明彦さん(NHKの「みんなの手話」のキャスターをしておられたこともあり、「日本語手話辞典」の監修者です)が言っています。

「半端ではない」を「半端ない」、「気持ちが悪い」を「キモい」などと表現することは、国語の教師がいった「未知な心の風景」を表現している新しい言葉ではなく、分かりきった考えを仲間内で共有するための「娯楽・会話促進・連帯…」のテクニックのように思われます。そして、そのようなテクニックに感じる違和感は、日常生活の「心の風景」の積み上げ方の違いともつながって、SNSなどによって加速されて、かなり「半端ない」ギャップをいろいろなところで生んでいるような気がしています。